

平成 29 年度第 2 回(平成 29 年 11 月 22 日開催) 総合教育会議 議事録(要旨)

1.開 会

★玉置総合企画部長

定刻がまいりましたので、只今から、平成 29 年度第 2 回津山市総合教育会議を開催いたします。開会にあたりまして、宮地市長から挨拶を申し上げます。

2.市長あいさつ

平成 29 年度第 2 回の津山市総合教育会議を開催しましたところ、ご多忙の中、ご出席いただき誠にありがとうございます。平素より皆様には、津山の次代を担う子ども達の健やかな成長のために、ご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

本日の会議には、学識経験者として、東京都八王子市立にぶかた式分方小学校校長のしみず ひろみ清水 弘美 様にお越しいただいています。特別活動を軸とした先生のご活躍は様々なところでお伺いしており、本市の総合教育会議にご参加いただけますことに心より感謝申し上げます。

さて、本年 4 月から、第 2 期の津山市教育振興基本計画がスタートし、各分野において様々な事業が展開されているところであります。

市民と教育機関、行政の連携と協力のもと、学力向上対策や学校施設の充実、生涯学習・スポーツ・文化施設の整備など、津山市の教育基本理念である「つなぐ力を育む」を柱に、10 年先の津山を見据え、効果的な施策に取り組んでいただいております。

本日は、本市の教育が目指すひとづくりとして、各分野別に議論して参りたいと考えております。

教育委員の皆様には、広い視野から忌憚のないご意見やご助言をいただき、また、清水先生からは、にぶかた式分方小学校をはじめとする、これまでの経験をもとに、ご意見やご助言いただきながら、本会議を意義あるものとしてまいりたいと考えております。

皆様のご理解とご協力をお願い申し上げ、開会のご挨拶といたします。

本日は、よろしく願いいたします。

★玉置部長

ありがとうございました。

ここから議題に入ってまいりますが、さきほど市長が申し上げましたように、本日は、東京都八王子市立式分方小学校の清水弘美校長先生にお越しいただいております。

清水先生は、東京都において特別活動を柱にした教育活動により、豊富な現場実績、幅広い知見と指導力により、子どもの自尊感情を高め、学級崩壊のない学校づくりを実現されています。2015 年にはモンゴル・エジプト・サウジアラビア・レバノン・先週はアメリカと様々な国の教育者が同校を視察に訪れ、「日本型教育」のモデル校の校長として活躍されています。

本日は、学識経験者の立場から協議に参画していただきたいと考えおりますので、よろしく願いをいたします。

それでは、津山市総合教育会議設置要綱第 3 条に基づき、議事につきましては市長が進行することになっておりますので、よろしく願いをいたします。

3. 議 題

【議題(1)】

◆宮地市長

それでは、ここからは私が進行をさせていただきます。

本日は、会議終了時刻を 17 時 00 分として会議を進めてまいりたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

それでは、さっそくですが、議題（1）「津山市の教育が目指す人づくり」 に入っていきたいと思います。

現在、「学校力向上推進プラン」の第 2 期を策定中ですが、津山市の子ども達が将来に向かって身につけなければならない力とはどのようなものなのか、また、教師に必要な力は、家庭では、地域では、と、本日は、いろいろな角度からご意見をいただきながら、津山市が目指す人づくりを皆さんで考えていきたいと思います。

まずは、「ア 子ども達に必要な力」として、学校教育部から現在の取り組みについて、紹介をお願いします。

●絹田学校教育部長

（津山市教育委員会の現在の取り組みを資料 1 にて説明。）

これからの時代を生きる子ども達には社会で自立して、夢・希望を持って、他者を思いやり自分主体的に生きるような、そういった力を身につけることが大事だと考えています。そういったことを司ることが我々の使命だと考えています。

津山市教育振興基本計画の教育基本目標の 1 つに、「個の確立」として「確かな学力の向上」、「豊かな心」、「健やかな体」「特別な支援」を施策の方向性に示しています。

現在の状況として全国学力学習状況調査では、津山市は全国平均・県平均には達してない、という状況です。さきほど清水先生ともお話をさせていただきましたが、点数だけではなく、子ども達が何かあった時にくじけない力だったり、応用力だったり、あきらめないこと、といった力をつけていくことの方が大事であると教わりました。そうは申しましても、ある程度の学力は当然必要ではありますので、そのためには基礎学力の定着が大事です。その一環として、補充学習の推進、学習プリント等を作成するソフトの導入、少人数指導の導入などを行っているところです。

本年度から 3 年計画で市内 35 校の小中学校に指導用タブレットとデジタル教科書、プロジェクター、80 インチの電子黒板を導入していくこととしています。本年度はモデル校 5 校に導入して検証をしているところです。

また、30 年 1 月稼働を目標に子ども達の成績や出欠などの状況を把握する「校務支援ソフト」を導入して、先生方の負担の軽減を図りながら、子ども達に向き合う時間を少しでも確保していきたいと考えています。

次に、「豊かな心」ですが、専門家を学校に派遣して組織的な指導力の充実を図っています。問題行動やいじめ行動への早期発見・早期対応を行っています。問題が起こった時の対応もそうですが、そういった土壌を作らないようにすることが第一なんだと考えています。

また、地域に愛着を持つためには地域人材を活用した教育的な活動や、津山の自然・歴史・文化などを学ぶ「ふるさと学習」などを推進しています。その他にも、道徳教育や情報モラル教育など

を通じて、子ども達が人としてのあり方・生き方をしっかり学んで多様な価値観を認識し、自ら考えて判断することができる、そういったことを育成していきたいと考えています。

次に「健やかな体」の育成では、津山市として特徴的なのはリズムジャンプを進めています。これは、美作大学の津田准教授が考案されたもので、EXILE やプロ野球の巨人軍のキャンプなどで取り入れられているものです。リズム感の俊敏性を高める運動として、体育の授業や縦割り班活動、運動会、部活動などで普及していきたいと考えています。

最後に「特別支援教育」では、津山市の中核施設として「津山市特別支援教育推進センター」があるのですが、早期からの教育相談や就学でも継続的な支援体制を構築して図っていこうとしています。「津山市教育支援委員会」を定期的で開催して、特別支援学級に在籍している子ども達の状況などを把握しながら、支援・指導につなげています。また、通常学級に在籍する教育上の支援を必要とする児童などについても、個別の支援計画を作成し、指導の充実を図っています。

以上、簡単ではございますが、津山市の子ども達に身につけさせたい4つの柱を中心とした取組の説明をさせていただきました。

◆市長

それでは、ただいまの説明も含めまして、「子ども達に必要な力」へのご意見をいただきたいと思います。教育委員の皆さまはどのように思っておられるか、ご意見をいただければと思います。

●原田教育長

私は、教育長になって1年半が経ちますが、それまでは津山東中学校、700名くらいの学校で4年間校長として勤めました。その時は、いろいろな子どもがいて、着任式に行ったらガムを噛んだり、ペットボトルを持っていたり、といった状態で学校に入っていました。10時くらいに学校に来たり、授業が始まっても10人くらいは廊下にいる状態でした。その子たちと話をする中で、満たされていなかったり、ほっといてほしい、といった子どもが多く、この子らを守らなければいけない、自分の目標を持ったり、夢を持たせるために学校があると考えていました。

まず、学校では、「笑顔があって元気な学校」になりましょう、といいました。その中で、挨拶、時間を守るようにしよう、と話をしました。3年生の子は「次に何かあったらここにいられない」という子も中にはいて、「おまえはラッキーじゃな!私は今年来たばかり去年のことは知らんのじゃ」と言って、今からが大事ということを伝えながら、関わっていきました。女の子でも全校集会の時に体育館の裏で6人くらいがたむろしていて、声をかけたら「私には関係ない。ほっといて。」と言われ「関係ないことない。東中の生徒じゃろうが。」と言って声をかけて、参加をさせました。何とかこの子らに、自分の存在を大事にしてほしい、自分の存在感をみんなに見てもらいながら、それがやる気につながるように取り組みを行いました。

学校教育課としては、いろいろな取り組みをしていますが、各学校のもとで、一人一人の子が「生きる」ことを大切にする、そんな学校づくりをしてもらいたいと思っています。子ども達が自信をもって、みんなの前でしゃべれたり、踊れたりが出来れば、その子の世界が変わってくる、という話をしています。

基本は笑顔があって元気な学校。そのためには、先生方が笑顔で元気があり、保護者の方も笑顔があり元気がある、という取り組みが大事になってきます。子ども達に必要な力というのは、世の中に出て可愛がってもらえることだと思います。やる気があり、あきらめず取り組んでいける、そ

んな基本的な力をつけてやりたいと考えています。

◆市 長

他の委員の皆さんはどうですか？

●森 教育委員

保護者の立場で教員委員をさせていただいていると思っておりますが、教育委員会事務局からの話を聞きますと、学校ってこんなことを考えているんだ、ということがよくわかるようになりました。ただ、それがなかなか保護者に伝わらないことが多いんだと思います。保護者は何がしてほしいかと言えば、子どもが笑顔で学校に行くことが楽しいな、というのが一番ではないかと思っております。学校なんかに行ってもしょうがないな、と思うんじゃないかと、勉強はわからないことがありますけど、友達とも遊べますし、いろんな楽しいことがあるということが1つでもあったら、学校に行こうという気持ちになるんじゃないかと思っております。そういう学校を作っていくことが一番だと思っております。

●寺元 教員委員

私は、PTA 会長、PTA 連合会の事務局長などをして、教育委員にお声をかけていただいたのですが、家庭とPTAが上手くつながって子ども達を盛り上げるということが大切だと思います。どの親も真剣で学校の行事によく出て来て、先生と話をして、誰がどう困っているかということきちっと聞く、ということからスタートすると考えています。その辺から、子ども達にどのように自尊心を持たせるのか、ということを考えていくのが大切だと思います。

私は高専で教師をしています。高専はおもしろい学校で、高校3年と上にもう2年の5年制で社会に出て行くこととなります。その時に、初めて本当の壁にぶつかります。就職活動は非常に厳しくて、特に成績の悪い学生には非常に厳しいです。何回も落ちると自尊心を損ない、うつ病になってしまう学生もいますが、それをフォローして就職が決まると、学生が社会で生きていくんだと思わせて、内向的だった学生も急に変わり始めます。そういう変化を見たときに、社会との繋がりまで含めて学校は考えていかなければならないんだと改めて思います。

津山市でも社会で自立する力、少々のことではへこたれない、そういう力をつけてやらないといけないと思います。壁にぶつかることが学校では少なく、社会に出るといろいろあると思います。壁にぶつけるわけではないのですが、タフな力をつけてやりたいと思っております。

●長江 教員委員

私は、PTA 時代もあったのですが、その時代はPとTが、ちぐはぐな時があって、ちょうどその時期に子どもが学校に行っていて、それを敏感に感じている子ども達がありました。PとTがどうしたら両輪になって子どもの育ちを支援できるかという思いがあって、PTA 行事で子ども達も参加できる、子どもが活躍できることを考えてやってきたのがいまだに続いて明日もあります。

その活動がベースとなって、生涯学習のNPO 活動もしていて、その経緯から教員委員に誘っていただきました。

今も学校支援ボランティアとして読み聞かせをしています。子ども達の笑顔とか元気にいっぱい力をもらいますので、そういう学校であってほしいと思います。

●尾島 教員委員

私は、教員を60歳で退職して、3年間の充電後、この4月から教員委員ということで関わらせていただいています。

今、事務局から4つの力「主体的に生きる力」「他者を思いやる」「夢や希望をもつ」「社会で自立する力をもつ」こういった大きな力を持つ、身につけさせようといった時に、具体的に何をすれば、このような力が子ども達につくのかなと思います。あまり難しいことを言ってもダメなんです。私は小学校の教員でしたから、経験としてやろうとしたのが「くつを揃える」から入りました。子ども達の中でくつが揃い出しますと、不思議なんですけど教室の後ろのロッカーの中が揃い出します。くつを揃えることで、子ども達の中に次の発見が生まれるという経験をしました。

夏休みに教員に「2学期から何かやりましょう!考えてきて!」と声かけをして、くつ揃えが出て来ました。また次の年に同じように声かけをしたら「もくもく掃除」というのが出て来ました。週に1回木曜日に黙って掃除をするというのですが、それをやってみようとなり、音楽もかからない、私語もダメ、案内もチャイムもない、先生も何も言わない、というのですが、そうすると子ども達が考えだすんです。そうしたら綺麗に掃除が出来るんです。

岡山弁で「うったて」と言うんですが、習字の最初にカアッと構えるんじゃないくて、みんなで出来るものを、安上がりで、目でみてすぐわかって、チェックができるものやっいてこう、としました。

そういうことをしているうちに、主体的に生きる力とか、自立する力、他人を思いやる力ができてくると思います。さきほど学力の話もありましたが、生きて働く力というものは違うと思います。その中で、もくもく掃除が出来出すとチャイムを守って着席ができるようになります。

子ども達に、何かを育てようと思う時は、1つ徹底してやってみることが必要なのかなと思います。きちっと何かができる子になってくれれば上手くいくんじゃないかと思います。教育長の話にもありましたが、自分は疎外されているんだ、と思っている自己肯定感の低い子どもを育てると上手くいきません。そうでなくて、くつが揃えたら褒めてやる、黙って掃除ができた褒めてやる、自分のできることを増やしてやる、ということが子どもを育てる大きな力となると思います。

◆市長

ありがとうございました。5人の教育委員に思いを聞きましたが、私はこの5人教員委員を非常に信頼していて良い体制が組んでいると思っています。

清水先生はどのようにお考えでしょうか?

●清水先生

三分方小学校からまいりました清水です。壹、弐、参の漢字の弐で、もともとあった地元のアマノさんというお殿様の3人の子どもが大変仲が悪くて、特に長男と次男の仲が悪くて、遺産相続の時に壹分方、弐分方、参分方に分けて配分したんですが、そのとき名前が残って弐分方となったそうです。武田信玄の流れだそうですが、壹分方と弐分方の間に参分方を細くいれて土地を分配したそうです。八王子城なんかもあって戦国武将の話も沢山ある高尾山の麓からやってまいりました。

校長歴は6年目です。副校長は4年ですので、管理職は10年目となります。教員になって33年で若輩ものですが、できる範囲でお話をいたします。

この資料で、主体的とか、他者を思いやるとか、夢や希望や自立する力というのは素晴らしいと

思います。私は特別活動を専門にやっていて、この目標は特別活動の目標なんです。だから、今回私を呼んでいただいたのは正解だと思います。

教育長さんの話の中で、「笑顔・元気」は大事ですよ。私が学校経営をする上で、一番大事にするのは笑顔なんです。私の一番のとりえも笑顔なんです。なぜ良いかというとトレーニングしているからなんです。カメラを向けられて油断するとひどい顔になってしまうんです。カメラが向いていれば絶対笑顔になっているんですね。それは33年間トレーニングしているからなんです。

笑顔でいると子ども達がすごく真っ直ぐ伸びてくるんです。これは商売道具ですので、つまらない顔で授業している先生に対しては「顔が怖い」って言います。特に、男尊女卑とか関係ないのですが、女の先生は性別の持ち味があるじゃないですか。怖い顔でしゃべる人はダメ、笑ってみて、もっと、もっと笑ってみて、と言います。うちの学校は平均年齢35歳なんです。5年目くらいの先生が半分くらいいます。私が先生の中では最高齢で若い学校なんです。若い先生の方が堅いんです。なんか怒られないようにしているですよ。私の学校に来ましたのに、そんなカチカチじゃ困ってしまうんです。笑顔の練習や、化粧をちゃんとして来なさいとか、綺麗なお姉さんの方が子どもは絶対好きですからね。笑顔ってというのはすごく大事なんです。

今、環境省の仕事もしています。誕生学という仕事をしていて、赤ちゃんがきちんと心豊かに育つためには、オキシトシンという脳内ホルモンがすごく必要で、それを出すためには、スキンシップと笑顔と^{えこえ}笑声なんです。全校集会の時に、笑声も必要ですよって伝えるんです。明るい声ができない場合があるんですが、自分で作りなさいっていうです。口角を上げると声が明るくなる、それは笑声だよっていうですね。笑顔と笑声とスキンシップ、教師からこれをすれば子ども達は安心するんです。そして、笑顔は必ず移るんです。いつも笑顔でいつも機嫌がいいと子ども達は安心するんです。それを教育長さんが言われて、私と同じだなと思いました。それに私は「そ・わ・か」と言って、般若心経の最後にあるんですが、掃除と笑いと感謝の話をします。掃除はすごく大事で、くつを揃えるというのも、お坊さんが「くつを揃えるのは心を揃えること。世界平和につながるんです。」と言っていました。学校が荒れ始めると必ずくつが散らかる、そういった点ではくつを揃えることは気持ちいいですね、といったことを子どもに教える取組の一つ一つはすごく大事です。

教育長さんが言われた、子ども達が「関係ないよ」とか「どうせいてもしょうがない」ということで、一番大きな問題は「居場所がない」ってことなんです。居場所を作る、そのことが特別活動なんです。居場所というのは自尊感情の中でもとても大事な心をつくるものの一つです。自分はここにいていいんだ、そういった気持ち、自分はこのメンバーなんだ、この社会を作っている一人なんだ、というものの考え方が自尊感情につながるんです。それは特別活動の中で、集団で何かをやっていくという中で「協働をする」ということをやらせるんです。しかも、やや苦しいようにさせていくんです。苦しいことをみんなで必死に乗り越えるということが、乗り越えたときの達成感になりますし、居場所づくりにもなります。あなたがいたから出来ましたよ、ということをお互いに認めあえて、それがそのまま自尊感情につながっていくんです。

森委員が言っている「学校が楽しい」というのは、学校は楽しいだけしかいない、くらいに思っていて、私は楽しい学校をつくるために、校長としてやっているんですが、あまりにも単純な言葉ですので、何にも考えてない言葉のように思えますが、本当はものすごく奥が深いです。楽しいというのは生きるエネルギーとなります。親は子どもが楽しく学校に行ってくれば、後はそれほど望まないんですよ。子どもは背が伸びるのと同じように、ほっといたら伸びるんですから、楽しく学校に行っていれば必ず伸びるんですよ。それなのに、学校に行きたくないとか、いじめがあ

るとか、どうせ自分なんかできないとか、そういうマイナス面で、せっかく伸びるエネルギーを抑える条件の方が最近は多くて、特に、人と比べるとおまえはできないとか、になると本来伸びる力も伸びません。親がなくても子は育つんですから、教師なんてできることなんかはほとんどありません。周りで応援するだけですよ、と先生方にいつも言っています。子どもの本来伸びる力をきちんと伸ばす、という体質をつくっていくということが大事で、それには、安心・安全って絶対大事なんです。身の危険があったらダメなんです。安心安全がないと次の社会のステップにつながっていかないんです。いじめがないとか、認められるとか、否定されないとか、そういうことが学校の中で確実に保証されますと、子どもはほっといても伸びるのですから、先生方にはがんばらなくていいですよ、と言っています。

親もそこは願っているところですし、子どもが楽しく学校に行っていれば、先生と親がぶつかり合うことにはならないんです。私の学校は、行った当初は、超モンスターペアレントの嵐で、おばけ屋敷のようでした。毎日毎日いろんな人が来てましたが、今はまったく来ないんです。怖いからかもしれません…。ボランティアも一人もいない状態から、図書ボランティアが出来て増えて、子どもの前でも読む楽しさを身をもって感じて、口伝えによって伝わっていく、というふうに変わってきてます。それはなぜかといいますと、子どもが楽しく学校に来ているからです。その1点だけです。ほかのことは望みません。八王子市の学力は東京都の中でも低いほうなんです。しかも、その八王子市の中でもうちの学校は低いんです。でも、八王子市の教育長は学力の向上なんて言わないんです。学力より自尊感情の方が大事だ、ときっぱり言って、そうすると校長達が安心するんです。前の教育長は学力ってすごく言いました。あと服務事項をすごく言ってきました。服務事項を連呼しますと、校長も服務事項と言ってきました。教師は息苦しくなって、それを子どもに向けます。そういう循環に入ってしまう。だから、教育長がおおらかに見てくれますと、校長は信頼されているんだな、と思います。前は校長会で教育長の話を書き聞きますと、チツとか言ってストレスを持って帰って来てましたが、教育長が替わって、「大変ですね、問題はいっぱいありますけど、自尊感情はちゃんと伸ばしてくださいね。」と言ってくれていますと、先生方は安心して伸びます。いろんなことが良い方向に変わっていくんじゃないでしょうか、少なくともうちの学校はよい方向に変わって行ってます。私が一番大事だと言っていることを先生方も一番大事だと言ってくれていますので、学校中が変わって行ってます。

だから、教育長のお仕事って市全体に影響していて、替わられて初めてわかります。ここの場合はシンクタンクですから、いろんな状況を分析して対応策を考えたり、提言することがここのお仕事ですが、Doタンクというのが学校であり、具体的なものを起こして子どもを今の状態から変えなければいけません。くつ揃えとか、モクモク掃除とか取組を行う必要があるのですが、実は取組は何でもいいんです。徹底してやるのが大事なんです。やると決めたら徹底してやります。本当になんでもよくて、それをみんなが徹底して出来たということが大事なんです。出来たんだ、というところに価値があります。簡単なことを徹底させる、ということは本当に素晴らしいです。

うちは特別活動の中でやっているんですが、できることを増やして自信を増やしたり高めたり、お互いが認め合ったり、そういったことが広がっていくということが、とってもいいことだなと思います。

私は、いい小学生をつくっているわけじゃなくて、いい大人をつくっているんです。日本の国を形成してくれる社会人をつくっているんです。教育基本法のベースが、人格の完成と国家社会の形

成者の育成という2本の柱ですから、私たちの仕事は教育基本法のもとにスタートしています。社会で必要な、社会で働ける、社会できちんと家庭をもてる、ちゃんと働いて税金を納められる、そういう人間をつくるのが私の責務だと思っています。そのため、小学校の間で完成する必要もありませんし、今の学力は答えがあるものにいかに早く正しく答えを書けるかということを競って、それはおそらくスマホに負けます。でも、できる方が便利ですので、知識は持っていて不便ではないのですが、知識とか知能とかいうものよりも、まとめて束ねて応用していく知恵とか、どこまでも答えのないものを追いつける知性とか、そういうことを鍛えていくことの方が、義務教育の仕事だと思っています。必要な知識は大人になってから必死に学んだ方が早いです。市の皆さんなんか特にそうですね。私も東京都庁で1年間OLをしたことがあります。都庁の方々とは異動すると1週間後には全然畑の違う仕事に入りますのに、2週間後にはその仕事を100年前からやってたような顔をして都民に説明ができます。教員は同じ畑で異動するのに、あんなに騒ぐのはなんでだ、と思うんです。行政の人は異動しても、そこでバツとやるじゃないですか。そういう風にはできなければいけません。そういう人を育てなければいけないと思っています。水道局で得た知識は主税局ではなんの役にも立ちません。でも、水道局で学んだその経験や課題を解決していくんだという前向きな姿勢は主税局に行っても使えます。そういうところを鍛えるのが、学校の仕事だと思います。それが出来れば自動的に学力や体力は上がってきますし、あとから付いてくるんです。特別活動をしていて、バツと伸びるのは、この後で説明しますが、自尊心と規範意識。この2つは特別活動をすればすぐに伸びます。ぜひ、特別活動はがんばってやってほしいと思いますが、やり方を知っている教員がすごく少ない状態がすごく残念で、それを伝えるためにこうやって私が来ているんです。

シンクタンクとしてやっている皆さんの方向は私も賛同できますので、あとはいかに現場に具体的に落とししていくか、そのHOW-TOを現場の先生に伝わるようにしていただいて、教育長さんは現場が振る^{いち}いたさせるように、優しく笑顔でお願いします、ということ、一校長として思います。

◆市長

短い時間ではありますが、先生に来てもらって良かったと思っています。

子ども達が多く時間を過ごす楽しく学べる場が学校であり、そんな学校の力をさらにレベルアップできるよう、十分な議論の上で学校力向上推進プランが策定されますよう、よろしく願いをいたします。

【議題(2)】

◆市長

それでは、次に、「イ 教員に必要な力」ですが、同様に学校教育部から現在の取り組みについて、紹介をお願いします。

●絹田学校教育部長

資料2により説明を行います。

教員に求める力というのは、津山市も笑顔があって、元気な学校を目指しております。津山市の中にあっても若手の教員がどんどん増えていっている状態で、経験豊富な方が退職して、指導力等

の伝承をどのようにしていくか、最近の大きな課題となっています。

教育に求める力として、「確かな学力と豊かな心、健やかな体を育成する力」を育成する力を持つこと、情熱と豊かな教育的愛情をもって子どもに接し、職員が自らに自信と誇りを持つこと、教育の日々の様子と子どもが成長した姿を通して地域や保護者からの信頼を得ること、こういったことを求める力として先生方にもお願いをしているところです。

先生方が元気で笑顔になりませんか、子ども達もなりませんので、まずもって先生方が自信をもっていて、笑顔で接していただければいいのではないかと考えています。学校がチーム全体でそのような形になるよう努めていく必要があります。

津山市の学校現場では、先生方には「点数・点数・・・」ということを行わざる得ませんので、学力向上に向けて先生方が一生懸命いろんなことを考えて子ども達に接していただいて、頭が下がる思いであります。私からの説明は以上です。

◆市 長

それでは、「教員に必要な力」へのご意見をいただきたいと思います。
教育委員の皆さまはどのように思っておられるか、ご意見をいただければと思います。

●原田教員長

さきほど清水校長先生のお話を聞きながら、同じ思いがあると思いました。教員に必要な力ということで、子どもを受けて止めてやる力が必要ですし、親の思いを受け止める力がなければいけないと強く思っています。先生達には、それぞれの学級担任、教科担任を任せています。ある保護者が相談に来たときに、うちの担任は連絡はしてきてくれますけど、それって事務連絡?と思うことがあります。もう少し付け加えて言うことがあるんじゃない?って話をしたことがありました。若い先生に聞いてみますと、顔を見たらなかなか言えないとか言うんです。そうじゃなくて、子どもや保護者の日頃からのニュースをポケットに入れていて、いつどこで会っても、こんなこと聞きましたよ、嬉しかったですよ、とかを言うようにしておきます。保護者の方にもお願いしたいのは、若い担任は頼りないかもしれませんが、自分の気持ちを少し抑えてもらって、手をつないでください。すれ違いじゃできないんです。若い頼りない先生ですが、先生頼むで!と言ってあげることでと、言ってきました。

教員としては、子どもと向き合う、保護者の方には子どもの良いところを言ってあげる、問題のあるところだけ伝えますと、子どものすべてを否定してしまいますので、良いところを日頃から見つけておくことが大事です。一人一人を大事にする力が教育には必要で、特に、若い教員は子どもを受け止める、保護者を受け止める、その力を身につけておけばやっていけると話をしています。

●森 教育委員

私は、保護者として4月なれば、「あたり、はずれ」って思ってしまいます。若い先生で新卒とかですと、はずれなんですけど保護者が応援したくなる先生がいるんです。それから、授業参観とか行っても、校長先生が校長室に入れ入れと言うんです。学校のいろいろな事情を聞きますと、やっぱり学校を応援しなくちゃ〜って思ってしまいます。校長先生が替わられたとたんに、校長室に行くにくくなったよな・・・ってなると関わり合いを持ちにくくなって先生方の不協和音にも敏感になってきます。

先生方には弱みもみせてほしいですし、身近な存在としてあってほしい、と思います。先生は大変だと思いますし学校訪問した時も、先生の顔が暗くて潰れそうな先生も何人かおられます。いろいろな努力で口角を上げた笑顔で子ども達に接してほしいと保護者は期待します。

●寺元 教育委員

我々も授業の上手い先生、字の綺麗な授業をされる先生、いわゆるプロの先生がおられます。ICTとかプログラミング教育など少しずつ時代が変化してきて、答えを教えない科目が出来てきて、子ども達が問題を見つけて解決していくような、教員が答えをもっていない科目が増えてくるだろうと思います。そのような時に、上手くサポートして上手く答えに導ける、先生が自信に満ちて取組で、子ども達と一緒に考えながらゴールに導いていける、今の先生の教え方とは違うようになってくると考えています。特活はそういう風なところがあると感じてます。そういう学んでいく先生を我々は期待しています。

ICTは何の略と問われると「いつも、ちょっと、トラブル」と答えます。先生はそんなところでオタオタせずにきちっと対応していけるようなゆとりも必要ですし、経験も必要だと思います。ICTによって空いた時間を作ってもらって、子ども達と少しでも触れあえる楽しい時間を作っていくことが必要だと思います。

●長江 教員委員

学校に出入りを行う機会が多いなかで、4月に始まった時の職員室の雰囲気と、夏休みが終わっていろいろと経験した後に雰囲気がグッと変わって笑顔が増えてきた学校があると安心感を覚えます。きっと課題はいっぱいあるんですが、それを一緒に解決しているという雰囲気が伝わってきますと、とても嬉しくなります。先生方と個性が活かされるような現場であってほしいな、といつも思っています。先生方もみんな一緒じゃありませんし、子どもも一緒じゃありませんし、それが社会であり、個性だと思います。

●尾島 教員委員 1.05.22

教師に求める力というのは、ずっと前からあって、言葉は悪いんですが「ボス猿」に教員がなってませんと、逆に子どもにボス猿の座を奪われたら学級崩壊です。とにかくボス猿の地位を教員が握っておくと、笑顔が出てきて元気になります。5~6月で学校訪問に伺いましたが、津山市の半分の学校を廻ったんですが、笑顔の学校はホッとします。でも、逆に暗い学校は、教員の笑顔がなくなっています。

小学校のことですが、今から10年前に、ひしめく50代がいて、もう10年後には1/3が新採に替わります、という状況があって、さきほど清水先生が言われた学校教員の平均年齢が35歳平均という学校が津山市にも現れてきてます。新採の教員がボス猿になれるか、教師の力が大切だと思います。さっきICTの話が出ましたが、ICTは教師力をアップさせるなと思います。ICTはいつもちょっとトラブルですが、上手く使えば教師力に大きな差が出ると思います。でも、最後は機械じゃなくて人の力ですので、人が教育をやっているかなければいけないと考えています。

◆市長

清水先生、ICTの略語のいつもちょっとトラブルは初めて聞かれましたか？これだけでも津山市に来てくれた甲斐があると思います。

私も、写真屋さんに笑顔を褒められますが、「笑顔」がキーワードのようですね。

●清水先生

ホントにICTはいつもちょっとトラブルで、そのトラブっている時間がイライラしてパソコンがストレスになっていますが、現状を抜けると良くなると思います。八王子市でもシステムが今年度から入って、何もかもICTになっているんです。上手く使えたら絶対に楽なはずなんですが、今はいつもちょっとトラブっていますので、前の方が早い!って教員がストレスになっています。でも、若い人の方からそのストレスを抜け出していますから、もう最後に私が置いてかれています。それぞれ活躍する場があっていいかなって思っています。そのうち子どもがICT機器をサッと動かし出すと思っています。

タブレットも今回八王子市に入れたかったのですが、東京都港区で流行っている塾があるんですが、AIを使ったタブレットを入れています。間違いを解析して、個人にあった問題を提供してくれるものなんです。タブレットが家庭教師のようになっているんです。完全な個別学習。学習は個別学習でやった方が良く、みんなで一緒にやった方が良く、AIはこれから使っていかななくてはならないものです。ネットにつないでAIを活用する必要があるのですが、セキュリティの問題があって八王子市ではAIは出来ませんでしたので、津山市でやってほしいので譲ります。

教師の力についてですが、私もボス猿になれて同じことを言ってます。子どもってアドバルーンを上げるんですね。ここまでやっていいかなって、ちょっとずつ広げてくるんです。私は先生方に、子どもがアドバルーンをあげてきたら頭からたたき潰せって言ってます。それでボス猿の位置を確立して、学級の中に秩序ができますと、子ども達はその秩序の中で安心してできます。そこが自由になってしまうと無秩序の状態となるので危ないです。だから、警察みたいところがあるから我々も安心して暮らせる、そういうことも必要だと思います。もちろんやり方もあります。教員が一方的に抑えつけて意見も聞かない、ってことではなくてボス猿の作り方はとても大事なんです。教員はしっかり自分の個性をもって、それぞれの得意不得意を活かしながら、チームを組んでやっていくこともすごく大事なんです。

教員に一番必要な力というのは、子ども達のいいところを見つけて、ニコニコ褒めてあげる、応援団みたいな感じですかね。そういった余裕が必要なんです。子ども達は悪いこともいっぱいしますし、その時は怒りますが、いいところもちゃんとあります。親には困ったことは伝えますけど、存在の良さは親に伝えていきます。

うちは初任養成学校みたいになっていますが、でも、入ったら抜けないです。親には教員を育てなさいと言ってます。教員は教室の環境の一つなんです。だから、教室環境の暑いとか寒いとかと同じように、先生が気持ちいいか悪いかというのは、教室環境の一つです。教員の悪口を言って、教室環境を悪くしたらダメなんです。親が教員を育てます。いいところを褒めて、自分の子の教室の環境を良くしていくことが、自分の子どもを守ることになるんですよ、と言っています。

【議題(3)】

◆市長

それでは、次に、「ウ 家庭に必要な力」ですが、生涯学習部から現在の取り組みについて、紹介をお願いします。

◇生涯学習部長：（事前配付資料を活用して説明）

こども保健部と協力して、一人一人の保護者が自分の家庭を見つめ直し、それぞれが自信を持って、子育てに取り組むよう、いろいろな学習機会や支援を行っているところです。

特に、学校との関係は「親学講座」をPTAと連携して実施したり、子育てワークショップを学級Pと連携して実施しています。また、市P連全体の話になりますが、教育講演会を行ったりという形で、学習機会を設けております。

また、こども保健部を中心に、相談体制、支援が必要な家庭への取組、保健師の活動、こども子育て相談室、鶴山塾を中心とした不登校支援を実施しています。

課題としては、参加してほしい保護者がなかなか参加しない、という傾向がありますので、これをどのように克服していくか、というのが課題となっています。

●清水先生

まったくそのとおりで、来て欲しい保護者がこない。

●原田教員長

今、取組については生涯学習部長が説明したとおりなのですが、親として大切なのは、子どもが生まれてきてくれた時のその時の思い。首が据わったとか、ハイハイしたとか、立ちだした、歩いたとか……でも、いつの間にか自分の子どもがかわいいという思いを伝えなくなっていると思います。親も生きていくのに一生懸命なのですが、我が子の成長を喜んでもらいたいです。運動会や文化祭などを見て「すごいなあ」という気持ちを持つと思いますが、その気持ちをずっと続けてほしいです。自分が育ててきた我が子を、学校の先生、おじいちゃんおばあちゃん、地域と一緒に育てていくという考えが必要だと思います。

●森 教育委員

子育てが終わってみて、子育てが出来るときに、子育てを楽しんでもらいたいな、と思います。あとで振り返るとすごく楽しい時間だったと思っています。子どもそれぞれで、二人いたら比べてしまうんですが、楽しかったなと思います。ママ友で繋がりができますと、横の繋がりを広げて、個々に誘っていくのが、一番いいと思うんです。子どもを中心とした行事だと親が来るのは小学校くらいまでで、中学校になると来なくなります。それを個々に誘っていく必要があると思うんです。親同士の繋がりをつくっていくのは重要だと思います。忙しいお母さんに少しでもいいですから、子育てを楽しんでもらいたいです。

●寺元 教育委員

津山市では3世帯の家庭もあります。そういった家庭が多い地域は落ち着いています。子ども達も帰ればおじいちゃんおばあちゃんがいて、「ただいま」と言える家庭は子ども達も落ち着いています。市街地や新興住宅地などは核家族で両親は非常に忙しい、ということになると子どもがほっとかれることが多くあります。津山市はスマートホンの所持率が都会より高いんです。子ども達が昔だったらゲームをしていたのですが、今はスマホをやっています。利用時間も長くなっているというのが、津山市の特徴となっています。

こういう状況はホントは良くなくて、子ども達が学校のあとでも集まったり、そういうことを支援することも必要だと思います。市でも取組を進めているのですが、危険な状況にある親ほどSOSを出しません。上手くサポートをしなくてはならないと思いますが、田舎の方が逆に問題が進行するケースもあると考えています。

●長江 教員委員

「親育ち応援プログラム」のファシリテーターをしていて、課題としてあがっていた、出て来てほしい保護者が出てこない、は大きな課題でもあるんですが、そこに出てこられる保護者の皆さんも不安を抱えて子育てをしている、という実態をいつも感じます。

自分の子どもはかわいいと思っても、日々の生活の中で、いろんなことがあって、そこに来ることで、私だけじゃない、他の人も同じようなことを思っているんだ、と感じて元気でましたと言ってくれる人や、しっかりやっていこうとか、ここに出てこられる人にとっては、このプログラムは有効だと感じています。

パンフレット等も現在作成しているところで、支援者の方も手伝ってくれていて、とても心強いなと感じているところです。

●尾島 教員委員

来て欲しい人が来てくれません。そういう人こそクレームでよく学校に来ます。

親が困っていることは絶対あるんです。その困り感が、大きくなりますと、行きやすい学校とか教育委員会に行くんです。困り感を共有できるかなんです。教員も教員委員会としても、親の困り感を共有しますと、この人頼りになると思うんです。頼りにしてもらったらチャンスが生まれてくると思います。

いつも研修などに来ない人が、クレームで来たときが大きなチャンスだと思っていきませんと、難しいと思います。

●清水先生

家庭に必要な力といいますと、「子どもを愛する力」だけなんです。

私は、校長室だよりを教育委員会に内緒で6年間出していますが、好き放題書いて親の啓発をするため「親ばかりのすすめ」として発行しています。学校の中で困った親の話を、別の親のようにして書いて出す訳です。正しい親はこういうふうに行動するものですよ、って書いて出すんです。そうしたらすごい人気があって、親ばかりのすすめを配りますと、おばあちゃんにコピーして渡しているんですよ、って言われます。教員はすぐにあの人とわかるんですが、当の本人は、いるんですねこんな人、なんて言うわけです。

そうやって親に対して啓発等を行っていますが、親に何回も言っているのは、「親の仕事は、子どもがそこにいることだけを、ただひたすら喜ぶ」存在承認と呼んでいます。だけど、生まれてくれてありがとう、がいつの間にか成果承認になります。こんなことができるようになって偉いね、これができるようになって偉いね、といいますと、ある時出来なくなる子どもに対して、勉強ができない、スポーツができない、音楽ができない、友達と上手くいかない、いろんなことが起きた時に、他の子は出来ているのに、なんでおまえは出来ないんだということになってしまいます。存在

承認をし続けることが親の役割なんですけど、成果承認に絶対に移ってしまいます。これが出来るようになったら、次を用意する。そこを親があきらめて、今の状態を「今日も生きてて良かった」として抱きしめる。そのことを親がひたすらやってくれたら、子どもは出来ても出来なくても、豊かな子どもになります。

うちの学校は特別な支援が必要な児童の割合が高く、家庭の所得が低い地域です。特別な支援が必要な親がいたりします。でも、親がいつもニコニコ笑顔で楽しくしていると、兄弟すべて特別な支援が必要な子どもでも、ニコニコ笑顔で学校に来ます。中学は特別支援学校がいいですよと助言したのですが、普通の中学校に行って、勉強も全部はわからない、部活も入っていない、でも学校は楽しいですかと聞きますと、楽しいと答えてくれます。何が楽しいと聞きますと、登下校が楽しい、なんて答えてくれます。その子はやっぱり親に愛されています。それが強み。親に必要なものは、子どもをストレートに愛する力、愛し続ける力だと思います。

教員が、親を褒めてあげると、その気になってきて、モンスターからボランティアに変わります。子どものことに一生懸命ですね、立派ですよ、とか言いますと、保護者が教員と話ができてします。

教員は、親に必要な力は子どもを愛する力ですよ、他のことは何もできなくていいですよ、それが出来ているからあなたは立派だ、とって親を育てる、ということが大事ななと思っています。

【議題(4)】

◆市長

それでは、次に、「ウ 地域に必要な力」ですが、生涯学習部から現在の取り組みについて、紹介をお願いします。

◇生涯学習部長：(事前配付資料を活用して説明)

資料の中に書いていますが、地域学校協働活動として、以前、学校地域支援事業としてありましたが、名前が変わり、市内全小中学校で行っております。それから放課後子ども教育は市内20か所を実施しており、体験活動や学習支援を行っています。

それから、「つやま子ども未来塾」として、津山の歴史や文化、産業などをテーマに高校や大学、企業等と連携し親子などで学ぶ学習講座を開催しております。

「中高生が活躍！おかやま創生を支える人づくり推進事業」として、公民館を利用して、中山間地域の中高生が、積極的な地域参加や地域の人との交流を通じて、研修会や親子交流会、湯郷ベルとの交流会など、将来の地域を担う人材育成など、人づくりやまちづくりを進めております。

また、キャリア教育について、大学生や大人が入って自分達のキャリアについて話をする「だっぴ」を開催しています。

こういった取組を、公民館を中心に学校と公民館が連携して、子ども達の居場所づくり等を行っています。

課題として、地域によってばらつきがあります。全市で活動を行っていけるような仕組みづくりが必要となってきます。

●原田教員長

地域の方は、自分達の地域の学校なんだという考えをもっていただいています。ただ、何をした

らしいのかわからない、ということがあって、コーディネーターの人を配置したり、公民館を中心として子どもの居場所づくり等の活動をしています。

公民館が市内23か所あるのですが、高齢者の生涯学習の場という雰囲気でしたが、今は、小・中学生が寄ったり、展示会をしたりして、地域が子ども達を受け入れてくれています。地域が子ども達の育ちを広げてきてくれています。

私が津山東中の校長をしていた時に、吹奏楽部はコンクールを目指して頑張っていたのですが、私が校長になってから地区の公民館で演奏や歌を行ったんです。そこでは、自分のおじいちゃんや近所のおばあちゃんが来てくれていて、涙しながら見てくれていたんです。演奏会が終わってから生徒に聞いてみたら「校長先生、こんなに嬉しい演奏会ができるとは思いませんでした。休みの日まで行かんといけんのか、なんて思ってたんですけど、コンクールより良かった〜。」と言われたことがありました。これは、自分達が地域に出かけることでみんなが元気になる、自分達を応援してくれる。公民館の活動の中で小中学生を活かしてくれている、これは大きなことだと思いました。

全市的に子ども達は、いろいろなところに出かけて行っています。それは地域が受け入れてくれていると思っています。学校と地域がつながっていく、これは大きいです。

●森 教育委員

私の住んでいる地区は、公民館がない地区なんです。学校の近くに公民館がないんです。公民館活動も子ども達は出来ていません。恩恵も受けていません。昔は公民館を作ってください、と随分言いましたが、今は人口も減ってきてなかなか難しくなっています。

小学生は、イベントをしても参加率がいいのですが、中学生は参加率が悪いです。中高生の地域での活躍はなかなか出来てないように思えます。部活や勉強で、地域と密着しなくなって地域から離れていきます。津山から出て行くと帰ってきてくれません。田舎の都市の大きな問題だと思えます。

地域も受け入れをきちっとしないといけませんし、地域に帰ってくる子ども達を教育しないといけません。どんなにいい企業があっても帰ってきません。その企業のことも子ども達は知らない、ということになります。そういうところが、地域が頑張らないといけないことだと思えます。

●寺元 教育委員

さきほど公民館の話が出ていましたが、私たちの時代では公民館は高齢者の施設というイメージがあったのですが、ここにきて変わってきてます。プログラミング講座でも、高校生を連れて行って高校生が小学生を教えています。年齢も近いので子ども達も話やすいですし、なによりプログラミングというと小学校の先生なんかは1歩も2歩も引いてしまいます。そこに我々（高専）の若い力が役に立っていると思います。想像もしなかったアイデアが出て来たりしますので、我々も力になってます。こういう活動がこれからは必要となってくると思います。あわせて夏休みの宿題をみるとか、公民館にも学生が行く場となってきました。また、学校からも学生にプッシュして公民館等へ出向かせています。

それから、森委員が言われた「地元に残る」ということがすごく大事で、学生は地元どんな会社があるか知らないんです。高専では、今年で3年目になりますが、12月に「地元企業PR会」を体育館を使ってやります。地元の企業に来ていただいて、1年生から連れて行って、こんなこともしている、こんな企業がある、ということを知ってもらっています。企業の方も募集をしたらす

ぐに反応してくれて、梓がすぐに一杯になります。小中学生にも広げていきたいと思っていますが、我々も含めて地元こんなすごい企業が一杯あることに気がついてません。優秀な学生ほど津山から出て行きますので、将来的には戻ってきて郷土を愛してほしいです。そしてそれを支援する体制を整えていくことが必要だと思います。

●長江 教員委員

学校地域支援事業が10年前にスタートして、私たちの学区は9年前に始めました。9年前は私たちが学校に入ることがハードルが高くて、職員室に入るのは、本当に緊張しました。何かネタをもっていかないと先生と話せない。そういう雰囲気があったのですが、おかげさまで9年で学校に地域の人がいることが自然になってきました。ボランティアさんも学校になじむのが早くて、子ども達も、先生と同じようにボランティアさんを受け入れてくれています。

先生がいろいろなことを隠さないようになってきましたので、先生がどんなことで困っているかボランティアさんもわかるようになってきて、そういうことが地域でも話ができるようになって、保護者に伝わるようになるようになりました。

もちろんボランティアさんの数の増減はありますが、確実に学校のことを理解している人が増えていると思いますし、学校にとってもありがたいことではないかと思っています。

●尾島 教員委員

民生委員さんは高齢者の世話をすることが自分達の仕事だと思っていますが、民生児童委員ですよ。人によっては、児童部分が少し弱い部分がある場合もあるんですね。児童の方にも力を貸してくださいと校長になった一番初めにやったこととなんです。これが結果的には良かったです。

民生児童委員、公民館長、コーディネーターさんと話をしてやったのは、公民館学習です。公民館の中には、地域の子は地域が育てるんだ、という思いをもった人が結構おられます。そういう人が、何をしてもいいかわからないから、くすぶっている人がいます。公民館で学習を始めた時にそういう人が積極的に動いてくれるんです。それから高校生、退職教員、地域の町内会の人に来てくれます。学区の半分の子ども達がそこに来てくれて、特に、支援が必要な子どもが結構来てくれます。これはいいな、というふうになって21の公民館でこれがスタートしました。今は、順調で、この取組は大きいと思っています。

なまはげを見たら怖くて子ども達は泣くことが多いのですが、親が出て行ってうちの子は良い子です、と言って帰ってもらいます。小さい時から怯えさせられたら、悪いことがなかなか出来なくなります。地域の行事を経験した子が親となつてつないでいきます。秋田県のテストの点が良いことの一端は、こんなことにも要因があるのではないのでしょうか。小学生の時に高校生や大学生に勉強を教えてもらったら、教えてもらった小学生が大きくなった時に、公民館で教えに来てくれるんじゃないのでしょうか。それが伝統などに変わっていくように思います。学力が上がる一つの要因になるんじゃないのでしょうか、と思っています。

●清水先生

公民館での学習支援はとてもいいですよ。異年齢の中で、子どもが子どもを教えるのはとても良くて、私も、近所の中学生の居場所のない子に、放課後に小学生の勉強をみてもらったりしています。中学生の居場所のない子に居場所をつくっているということも兼ねています。私は、プログ

ラミング教育なんてとてもじゃないけど出来ませんので、高校生なんか来て来て教えてくれたいいですね。英語なんかも教えられたら良いと思います。

結局は、地域というのは人とのつながりで何かをやっていくしかありません。うちも、ダンスクラブの子ども達に地域の夏祭りへ行ってもらっています。盆踊りや櫓の上とかで、ダンスを1曲披露するんです。そうすると親が見に来ます。今までかつてこの祭りこんなに人が来たことはない、というくらい人が集まります。今では、地域のあちこちの祭りにオファーがかかるのでハシゴすることもあります。踊るとみんなが喜んでくれて、地域の方が喜んでくれて、自分達もやりがいがあるってうれしいんです。ダンスクラブは、年間の活動の中に夏祭りがあるって、自分達がやりたい、というスケジュールを組んでいます。

あとボランティアなんですけど、私は、「いるだけボランティア」って言うのを頼んでいるです。自立歩行を条件として高齢者の方に学校に来ていただいて、廊下とかに椅子に座ってもらっているだけなんです。ただニコニコと。走っちゃダメだよ、とか言って、手すりを伝いながら階段とかを登っているんです。そんな方がいたら、子ども達は走れないですよ。普通は、廊下走るな！っていても走ります。これは、永遠のテーマなんですけど、ぶつかったら危ない人がいたら、子どもは走らないです。あと、掃除も高齢者の方と一緒にしますと、高齢者の方がほうきの使い方が上手いので子ども達は見て学ぶこともできますし、担任では目の届かないところの掃除場所を見てください。休憩するお部屋も用意してお茶も飲んでもらえるようにしてるんです。とにかく地域の人がいつもいる、という風にしていきます。防犯の課題もありますが、それ以上のメリットがあります。

私がここにくることになったのは、榎田さんという方のツテで来ているのですが、地域の街のプロモーションを高校生などの子どもが作っています。それで就職が決まったりしているところもあるんです。小・中学生ならその会社のポスターを作るだけでいいですね。その会社に行ってインタビューして、写真を撮って、それを組み合わせてポスターにするんです。それだけで、その会社のことを良く理解できるようになります。そんなことを総合的な学習に取り込めたら地域を知ることには小学生の役に立つと思っています。

結局、地域と学校がwinwinじゃなければダメ。やってもらえばっかり、やってあげるばかりではなく、winwinで両方に利益があるように人の繋がりというのが、地域と学校に必要なことだと思います。

◆市長

ありがとうございます。

この後も、清水先生には大会議室にて職員研修を行っていただけるとのことですので、どうぞよろしくお願いをいたします。

それでは、司会を事務局にお返しします。

4. その他

★玉置部長

それでは「5. その他」ですが、何かご意見がございますか。

(特になし)

5. 閉会

★玉置部長

本日は、各協議事項につきまして協議・調整をいただきありがとうございました。それでは、総合教育会議の閉会にあたり、寺元教育委員から、閉会のご挨拶をお願いします。

◇寺元教育委員

本日は大変ありがとうございました。いろいろなアドバイスをいただきまして非常に勉強になりました。最初に言われた「笑顔」が非常に印象的で、いかに笑顔をすることがどんなに大切か勉強をさせていただきました。私の恩師に「教員は役者であれ」と言われたことを思い出してまして、笑顔を作る時も、すぐにできるようにすることが大切な要素だと改めて感じております。

2番目は「自尊心」です。子どもの自尊感情を高めることが大切であり、何よりも保護者の自尊心を大切にすることが大事だと教わりました。子ども、保護者、教員のどこが欠けてもいけないし、三者の自尊心を高める努力を、怠ってはいけないなと感じました。

最後は愛情。親が子どもを愛するのは当然ですが、地元の人達も子どもを愛しています。表現できる場をつくることが大切だと思いました。

本日の会議の内容を、これからの津山市教育行政に活かしていきたいと考えております。

清水先生には、このあとの研修会でもお世話になりますが、本日は大変ありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いをいたします。

★玉置部長

ありがとうございました。

それでは、清水先生には、お忙しい中、ご指導・ご鞭撻をいただき大変ありがとうございました。この後、役所の部次長級と学校の校長・教頭等の管理職と一緒に受講する管理職研修を予定しております。非常に楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願いをいたします。

それでは、これもちまして、平成29年度第2回津山市総合教育会議を閉会といたします。ありがとうございました。（終了）